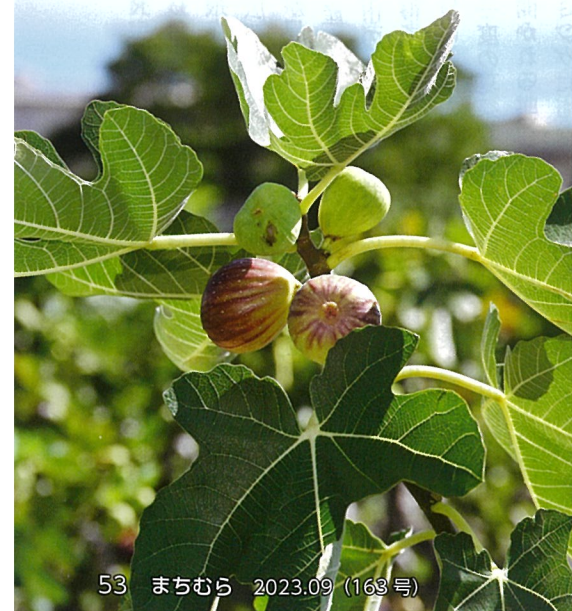




産直市場から コミュニティの再生をめざす

兵庫県川西市 東久代むつみ産直市場運営委員会





大阪駅からJR宝塚線に乗ると20分足らずで北伊丹駅に着する。駅前から見上げる空は思いのほか広く、飛行機が白い雲をかすめて飛んでいく。歩を進めると住宅の合間にいちじくの果樹畑が広がり、やがて「産直市場」とひととき大きく書かれた看板が見えてくる。

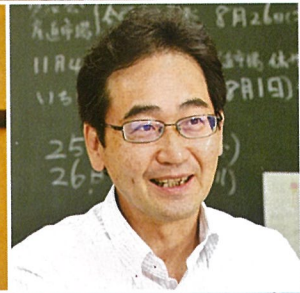
東久代むつみ産直市場運営委員会(代表・安芸宏美さん)は、兵庫県川西市のむつみ自治会館広場において、地元生産農家の協力を得て毎週土曜日の午前中に「産直市場」を開いている。この日は、同会とむつみ自治会(会長・錦操さん)が共催する年に一度の夏祭り「東久代むつみ産直市場 納涼いちじく祭」が開かれる。

お祭りのネーミングにもなる「いちじく」は、産直市場の看板商品で川西市は一大生産地。せっかくの機会でもあることから、同会副代表の西田直樹さんの案内で市内最大の一いちじく農家、西田穂美さんの畑を訪れた。

川西のいちじくは、完熟したものを朝採りする新鮮さが特徴。朝3時頃から収穫をはじめて毎朝出荷場に運び入れる。主力品種の「榊井ドーフィン」は川西が発祥の地。いちじくの生育には、水はけのよい土壌が適しており、近くの猪名川から水を引いて畑全体を浸す。1本の木から約540個が収穫でき生育はとても早い。西田さんの畑では約6千本を栽培しているようだ。産直市場へのお荷は同会代表の安芸さんから誘われたのがきっかけ。「お客さんからの反応を聞いたり、出荷したものが完売するとやりがいが出ます」と西田さん。産直市場は欠かせない存在だ。

地域の様々な方に親しまれる産直市場。その発足に至るまでには長い経緯があった。

東久代地域は高度経済成長期の頃から、隣接する伊丹空港を離発着する航空機の騒音問題が大きな課題となっていた。



昭和46年から平成元年まで航空機騒音対策移転補償事業が行われた結果、地区人口は約3分の1に減少し、商業や生活利便施設が移転していった。阪神間の利便性の高い地域でありながら、移転後の跡地が点在しまちの活力が低下。近年では、住民の高齢化による買い物難民対策や地域リーダーの発掘などの地域課題を抱えている。

こうした地域特有の課題を踏まえて、川西市では生活環境改善と地域コミュニティ再生を目的とした「川西市南部地域整備実施計画」を平成26年に策定する。当時、市職員で計画策定に携わった大田雅弘さんは「アンケートやワークショップを行い住民の困りごとを集約していった」と振り返る。しかしながら生鮮食材を扱う店舗の実現には至らず、買い物難民対策は喫緊の地域課題であることから、むつみ自治会の事業として平成29年4月に「東久代むつみ産直市場」を立ち上げる。産直市場を継続するうちに、単位自治会の枠を超えた東久代地域全体のコミュニティの再生をめざしていくことと、有識者からの助言もあり、令和元年からは近隣地域住民により構成される運営委員会を活動の形態とするようになった。

同会代表で、むつみ自治会の会長を長年務めた安芸宏美さんは、昭和40年からこの地区に住み地域の変遷をつぶさに見てきた。「コミュニティが危機を迎えた状態から這い上がるため、産直市場のアイデアを考え、みんなで一所懸命に取り組んできた」と話す。産直市場の売り子さんには高齢者も多いが、産直市場の活動が生きがいにつながっていることを実感しているという。

産直市場では地元生産農家の協力により、地場の野菜やいちじく等の果物、パンや豆腐などの加工品、市場からの仕入れ品も低価格で販売する。食材の販売に加えて、自治会館や交流テントでは交流スペースを開設しており、来場者同士の交流や、地区の民生福祉委員や自治会役員の協力による生活



や福祉相談を随時実施する。また、地元小学校の児童による販売体験など、地域社会・生活体験を学習する機会の提供も行っている。

17時から開かれるいちじく祭。自治会館の小さな広場で開かれる手作りのお祭りは、たくさんのお楽しみが並んだ。ゲームやメダカすくい、手持ち花火あそび、かき氷、お菓子袋のプレゼント、大人気のキッチンカーも出店。入口近くの棚には川西特産の看板商品のいちじくがずらりと並べられ、お客さんを迎える。

開場と同時に、お子さん連れの若い家族から近所のお年寄りまで気軽な装いで訪れる。いちじくを試食しながら買い上げる人。キッチンカーに並ぶ若いカップルの姿もある。休憩スペースでくつろぐ高齢の女性は「ここに引っ越してきて楽しい」と話す。産直市場の常連で近隣のマンションから毎週訪れ、買い物のおと知り合いとの歓談を楽しみにしているそうだ。いちじくの香りが好きだという外国人のファミリーや、農家の人に野菜の知恵を聞くという若いお母さんなど、地区内の住民に留まらず周辺地域から誘い合わせて来場する方も多し。自治会館の小さな広場に、賑わいが絶えることなく夜が更けていった。

当初の買い物難民対策から、地域の枠を超えて、多くの人の生きがい、楽しみ、元気の拠点となりつつある産直市場。安芸さんは「産直市場の取り組みが地域に認知されるようになってきた。地域の様々な人の思いや力を受け止めるまちづくりの拠点にしていきたい」とこれからのまちづくりを力強く見据える。

【連絡先】

東久代むつみ産直市場運営委員会
兵庫県川西市東久代1丁目630-1
東久代自治会 東久代むつみ会館内